

志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心

— 中部日本の火山等に関する記載をめぐって —

米地 文夫*

要 旨 志賀重昂の著書『日本風景論』(1894)の中心的な位置を占める火山に関する記載部分の分析検討のうち、中部日本の火山等に関する志賀の記載をとりあげ、彼の剽窃や改竄の諸相をさらに明らかにした。特に高頭式編『日本山嶽志』(1906)のなかに志賀の訳読として掲載されている“Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”の記事と『日本風景論』における記事とがほとんど同一の内容であることを明らかにし、剽窃の実態を検証した。また、志賀の郷里三河についての記載の不自然な比重のかけかたに、彼の強い愛郷心がみられることを示し、さらに大槻磐溪の語句の改竄が愛郷心と愛国心とを結び付けるための志賀の強引な操作であることを論じた。これら志賀が行った剽窃や改竄および不自然な構成などは、読者の愛郷心を、他国に冠絶する日本の風景を説くことによって愛国心を高めるための、確信犯的意図によるものであった。

キーワード 志賀重昂著『日本風景論』、高頭式編『日本山嶽志』、大槻磐溪、愛郷心、愛国心

はじめに

志賀重昂の著書『日本風景論』(1894)は、今なお、岩波文庫や講談社学術文庫などの一冊として復刊されており、景観論や日本登山史、思想史などの著作にしばしば引用されている。最近刊行された大久保(2003)の『日本文化論の系譜』の中でも、取り上げた15の著作の第一番目に『日本風景論』を据え、ここから近代の日本文化論を始めている。大久保(2003)は、志賀が「探検的、実地観察的」精神に基づいて「さまざまな土地を踏破調査」して多様で個性的な風土特性を見いだした点が「独創的、画期的」であると評している。

しかしながら、日清戦争開戦時に刊行されたこの本の好戦的性格や近隣諸国への蔑視的論述などへの批判を行った論考もあり、また『日本風景論』の内容に洋書からの剽窃があることも指摘されている。

私もまた批判的立場から、これまで『日本風景論』の分析、なかでも同書の中心的な位置を占め

る火山に関する記載部分¹⁾を中心に、分析検討を行ってきた。その分析の一部として、『日本風景論』の「日本には火山岩の多々なること」の項のなかの全国の火山について列挙した部分(『日本風景論』初版²⁾ 62~98頁、本稿では各論と呼ぶことにする)について、すでに北日本の火山(米地、1999)、東日本および小笠原列島の火山(米地、2000)のそれぞれに関する記載を取り上げて報告した。

前者では、志賀がミルン(Milne、1886)や神保(1891)の論文から剽窃して北日本の火山を記載したことと、それが自国の風景を賛美するための操作であったことを明らかにし、後者においては、志賀が火山に国粹的風景を求める発想を菊池安(1889)の論文から得たことなどを明らかにした。

本論文は、これらに引き続き、中部日本の火山に関する志賀の記載をとりあげ、彼の剽窃や改竄の諸相をさらに明らかにする。剽窃や改竄は読者の愛国心を高めるための確信犯的意図によるこ

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子

と、志賀の郷里三河についての不自然ともいえる記載に彼の強い愛郷心がみられること、愛郷心と愛国心とを結び付けるために志賀が強引な改竄やレトリックを行ったこと、などを明らかにしたい。

I 『日本風景論』における中部日本の火山記載と剽窃問題

1. 志賀の剽窃と高頭の『日本山嶽志』

志賀は『日本風景論』において、文芸作品引用の場合は、二三の例外を除き、作者名を明記しているが、同書中の科学的論文、著書、登山記録や旅行案内などの引用部分については、ほとんど出典を明らかにしていない。けれども、これまで立山の記載などにおける志賀の剽窃は諸氏により指摘されており、黒沼(1979、1991)は登山術に関してはガルトンの著書から志賀が剽窃したことを示した。米地(1989、1990など)は、『日本風景論』の核心ともいえる富士山の科学的説明が、ミルンの論文からの剽窃であることを明らかにした。

小島烏水は1930年に書いた「山岳会の成立まで」というエッセイ(『アルピニストの手記』1936所収)に『日本風景論』の槍ヶ岳の記載についてこう書いている。「山中光景の記事は、ロンドン、ジョン・マアレイ出版の『日本案内記』の英文を反訳されたものであることを知ったが、それはずっと後の話である」³⁾

ロンドン、ジョン・マアレイ出版の『日本案内記』とは、1881年にロンドンで刊行されたE.M.SatowとA.G.S.Hawesの共著である“Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”⁴⁾のことである。以下の文中においては“Handbook”と略称する。私は“Handbook”の初版は未見であるが、1884年に出た第2版(東北大学図書館蔵)を参照し、さらにこの第2版を翻訳した庄田元男の訳本(1996)も用いて『日本風景論』と比較した。

また、私は高頭式編『日本山嶽志』(1906)が別の形で、種本の存在を裏付けていることを見い

だした。高頭は引用した原典を明示しており、『日本風景論』からの引用部分には《風景》の略号を冠している。また《摘訳》として「志賀氏ノ譯讀セラレタルヲ筆記シテ、余ガ書キ綴リタルモノ」を掲げている。この訳読とは“Handbook”の翻訳であることは、志賀に対する「氏ハ特ニ厚意ヲ以テ二週日間ニ互リ、『はんどぶつく、ふおあ、じやばん』譯讀ノ勞ヲ與ヘラレタリ。」という高頭の謝辞から明らかである。

ちなみに、前記の小島烏水『アルピニストの手記』で問題にしている『日本風景論』の槍ヶ岳の「山中光景の記事」について、庄田訳も加え三者を比べてみる。

本論文では特に断らない限り、『日本風景論』からの引用には初版を用いた。(『日本風景論』および他書からの引用にあたっては、原文の振り仮名は必要な場合は括弧内に記し、それ以外は省略した。また、傍点の類も省略した。)

“Handbook”(庄田訳)…急流の左右の岸を移りながら三時間進んだところで(中略)切り立った花崗岩の岩塊は壮大な山容を示し(中略)特異なほどに荒涼とした険しさを見ていると、中国の画家がよく描く架空の山に似て居なくもない…

『日本山嶽志』《摘譯》…激流ニ沿ヒ屢々徒涉シ三時間程ニシテ、(中略)此近傍の諸高峰ハ皆花崗岩塊ニシテ、その荒怪ノ状、奇警ナル山水唐畫ニ似タリ…

『日本風景論』…花崗岩を穿てる奔湍に沿ふこと三時間、(中略)山愈々峻、景物益々莊嚴、花崗岩姿に其の怪奇の状を呈出すること一幅の大畫圖に異ならず…

前二者は同じ英文からの訳であるが、『日本風景論』もまた同様であることは明白である。志賀は『日本山嶽志』《摘譯》では直訳しているが、『日本風景論』では同一内容を、志賀らしい躍動的な筆致の文に仕立てている。

小島は『日本山嶽志』の編集に際し、監修と増

補とを行っており、巻頭に「日本山嶽志撰修に就きて」という一文を載せている。この文には小島が最初に高頭原稿をみた時に“Handbook”に依拠しているのを見て、「感慨措く能わざる者あり」と感じたことが書かれている。外国人の書に拠らないものとして、小島が自身で歩いた記録を増補として記載している、と自賛もしている。

ところで、小島が慨嘆する外国人の記事とは『日本山嶽志』のなかのどこであろうか。『日本山嶽志』は『日本風景論』と異なり、出典を皆、明記している。しかし、小島は「『日本山嶽志』亦外人の教へを受けたところ多し」と書いている。ということは、小島が指摘する“Handbook”に依拠しているという部分が、少なくとも志賀の《摘譯》を指しており、あるいは《風景》と略した志賀の『日本風景論』に対する批判をも含んでいるかも知れない、ということになる。

小島はこの『日本山嶽志』に寄せた文の中で「出所を文尾の括弧内に署して作家の徳義に違はざらむを是れ努めた」という。少なくとも、『日本風景論』刊行12年後においては、小島はこのような見識を示しているのである。

2. 火山に関する記載における剽窃問題

岩波文庫『日本風景論』の新版(1995)に付された近藤信行の解説は、志賀の剽窃への批判を逆批判して次のように言う。「それを外国文献の剽窃(ママ)とよんで、あたかも鬼の首をとったかのような言説を吐くのは、明治の啓蒙時代に対する認識がないからである。」

しかしながら、その明治の啓蒙時代の小島、のち岩波文庫『日本風景論』初版(1937年)に解説を書いたその小島の『日本山嶽志』の中の前掲の文「出所を署して作家の徳義に違はざらむ」を近藤は知らなかったのであろうか。

ただし山本・上田(1997)の言うように、小島も剽窃をしていた⁵⁾とすれば、彼も同罪である。山本・上田(1997)の指摘で卓見と思われる点は、《小島が岩波文庫『日本風景論』初版解説において志賀の種本を知っているにも拘わらず明らかに

しなかったのは、「日本山岳史の濫觴を日本人、あるいは日本人の『作品』に求めたいという意識」が小島にあったからであろう》と推測している点である。

なぜならば私は、志賀が種本を伏せたのは、「日本風景の科学的記載の濫觴を日本人志賀、あるいは他の日本人の『作品』に求めたいという意識」があったことが、剽窃の最大の動機と考えており、小島に関して山本・上田(1997)が記したことと軌を一にするからである。架空のことではあるが、おそらく志賀に彼の剽窃の釈明をさせたならば、彼は自分のためにやったのではなく、日本ないしは日本人のために行った、と言うであろう。

ここまで述べてきた剽窃問題においては、ガルトン F.Galton の“Art of Travel”(1885)やサトウ E.M.Satow とホーズ A.G.S.Hawes の編著“Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”を志賀が種本として行った操作が、問題になっている。さらに加えて、ラボック J.Lubbock の“The Beauties of Nature and Wonders of the World We live in”(1892)から発想などを得たことも指摘されている。

米地のこれまでの報告(1990ほか)は、志賀が『日本風景論』の中心的論点においても、以上の諸点以外に、多くの重大な剽窃を行っていることを、明らかにしている。

すなわち、ミルンの日本の火山に関する論文“The volcanoes of Japan”(Milne, 1886)や、火山の形態に関する論文“On the Form of Volcanos”(1878)などからの剽窃が、上記の著書と同様、もしくはそれ以上の狡智にたけた操作であったことを、これまでに報告してきた(米地、1989、1990、1999など)。

例えば『日本風景論』の核心とも言える富士山の形態についての志賀の数学的説明も、Milne の火山形態に関する論文(1878)からの剽窃であることや、その剽窃に当たって志賀が誤訳をしたため説明不能になっていること、などが明らかになっている(上記米地の諸報告ならびに米地・中嶋、

表1 志賀『日本風景論』における火山脈の名称と先行論文・著書との対比

	志賀(1894)	原田(1888)	矢津(1889) A	矢津(1889) B
本州東北	中央火山脈	那須噴火脈	東部中央火山脈	北東派ノ一
本州東北	西岸火山脈	岩木噴火脈	東部沿岸火山脈	北東派ノ二
本州東北	寒風山火山脈	弥彦噴火脈		北東派ノ三
中部日本	富士山火山脈	富士帯	富士帯	富士帯
中部日本	立山火山脈	御岳噴火脈	美濃飛驒山脈	
南日本	日本海火山脈	能登噴火脈		日本海派
南日本	白山火山脈	白山噴火脈	西部沿岸火山脈	西南派ノ三
南日本	阿蘇山火山脈	阿蘇噴火脈	西部中央火山脈	西南派ノ二
南日本	霧島山火山脈	霧島帯	霧島火山脈	西南派ノ一

左端に挙げた地域名は志賀(1894)の用いたもの

原田(1888):日本地質構造論地質要報明治21年4

矢津(1889) A:『日本地文学』第14章山岳(日本の山系)

矢津(1889) B:『日本地文学』第17章日本の火山(日本の火山脈)

未発表)。『日本風景論』は、火山を中心テーマとした著書であり、ミルンの日本火山に関する論文がなければ、全国の多くの火山に関する情報は得られなかったはずである。

本州中部の火山についても、ミルン(Milne、1886)論文の火山の表の記載を志賀は用いている。立山については、ミルンの two craters broken という記載から「舊火口二あり共に缺損す」という文を作っている。黒姫山の項は cone and crater を「圓錐鉢にして舊火口あり」と文章化し、焼山(越後)に関する well formed cone の記事が「はなはだ齊整せる圓錐鉢をなし」と訳され、no lava は「溶石は認めず」と記した。(後の版では溶岩と訂正されている。)

これらのほか、志賀が剽窃ないし無断借用した日本人による著作も多数に上る。次章以下に、富士山以外の中部日本の火山記載における剽窃や無断借用の典型的な例を挙げてみよう。これらの多くは、いかにも志賀自身が踏査した記事のようにみせているものである。

Ⅱ 中部地方の火山に関する記載

1. 妙高山

妙高山については多くを E.M.Satow らの編著

“Handbook for Travellers in Central & Northern Japan” からとっていることがわかった。M.Satow らの編著は『明治日本旅行案内』(庄田元男訳)全三巻として翻訳され、1996年に平凡社から刊行されているので、庄田訳と志賀の『日本風景論』とを、次のように並べて比較してみると、展望する内容、順序が全く同じで、志賀はサトウらの文をそっくりそのまま訳し、難しい漢語をちりばめて飾って美文としたに過ぎないことがわかる。

サトウら(庄田訳)南東方向には浅間と富士が眺められすぐ南には二つの峰を持つ黒姫が見える。その二つの峰の間に飯縄山の頭が見える。劔ノ峯(戸隠山)はおおよそ南南西に位置し、西北西に見える頭の丸い山は焼山で死火山として知られている。北東には越後の豊かな平野が広がり、その先に日本海と佐渡島が展開する。

志賀 東南に浅間、富士あり、南には黒姫の雙尖駢立し、其間より飯縄山を臨み、南南西に劔ノ峯、西北西に焼山の圓頂を看る、東北は越後の平野瀾望し、日本海は玻璃盤の如く盤上佐渡の青螺を盛る。

2. 浅間山

浅間山については『地学雑誌』に掲載された脇水鐵五郎の論文「浅間山の記」(1892)を、志賀は種本にしている。英語の得意であった志賀にしても、科学的な文章は日本語のもののほうが理解しやすかったので、この脇水論文を最大限に利用している。

脇水 浅間山に上るの道は通常二條あり一は信州沓掛驛よりするものにして沓掛より北に行くこと一里半にして小浅間山の麓に達し之より西に向て山嶺に達す。

志賀 登山するに二徑あり、一は信濃沓掛驛よりする北行一里半にして小浅間山(副火口)の麓に到り、之れより西に向ひて山頂に達す。

と両者はほとんど同じである。志賀は、小浅間山に括弧して副火口と付け加えているが、これは脇水が他の箇所でも小浅間山が副火口であるとしていることに拠っている。

脇水 浅間山の絶頂に上り西北を鳥瞰望すれば、二重の岩壁弓状をなして山腹を圍繞するを見る。之則舊噴火口の遺物にして、近きを前掛山と云ひ、遠きを牙山と云ふ。牙山は第一期環壁の一部分僅に残留するものにして其内面に向て急斜し安山岩の層理をなすは明かに舊噴火口の環壁たりしを證するに足れり。前掛山は其舊噴火口の側壁たりし趾一層歴々として明かなれば第二期噴火口の残壁たるに相違なし。然らば現時の浅間ヶ岳は第三期の噴出に属し、第二期噴火口内に生じたる一の新火口にして…(後略)

志賀 現火口の西北に二重の弓状岩壁あり、近きを前掛山、遠きを牙山と云ふ、共に舊火口環壁の残留するもの、即ち牙山は最舊火口、前掛山は舊火口、現火口は新火口なり。

志賀の文は脇水の文から「弓状岩壁」という不自然な表現を作り出し、また「現火口は新火口」という言わずもがなの説明?がある。しかしこの部分に相当する脇水の原文に当たってみると、志賀は内容を的確には把握していなかったことが分かる。また、志賀の文は脇水のそれを簡潔にしようとしたために、不適切な表現になっているのである。

このほか、『日本風景論』には、当然、浅間山について記載されるべきことが、欠落ないし不足している。その一つは浅間山は煙を吐いている山として知られているのに、『地学雑誌』に依るとした付図に「浅間山の噴煙」とあるのみで、文としては「四時水蒸気、亜硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯を噴出す」と記してある。実は脇水はこの水蒸気、亜硫酸瓦斯、硫化水素瓦斯の噴出について記したあと、これらのガスを「世俗誤り認めて噴煙となすものなり」と説明しているのであるが、志賀はそれを省いてしまった。

現在は鬼の押し出しとして有名な天明三年の熔岩流についても、脇水はナウマンの長さ十六里という数字をあげて説明しているが、志賀は全くこれに触れていない。

もう一点、志賀の文に脱落していることは、噴火による災害の歴史である。志賀は「此山は其の噴火の殊に強烈壮大なるを以て古来殊に顯著」と書いているのみである。天明の噴火を始め多くの噴火があった浅間山について、脇水のごとく29回の記録を列挙するほどではなくとも、ある程度詳説すべきであろう。しかしながら志賀は日本の風景の優れた点として火山を最重視し、賛美することに努めているため、火山災害には触れないのである。

3. 乗鞍岳

『日本山嶽志』の乗鞍岳についての記事は『日本風景論』が“Handbook”からの剽窃であることの明確な証拠を提示している。そこには次の二つの文が《風景》《摘譯》の順に並んでいるが、ここまでの志賀の文をあとにした書き方と揃えて

比較してみる。

《摘譯》…大野川村ヨリ一日ニシテ上下スルハ
疲労スルヲ以テ、村ヨリ登ル一里半ナル小
屋（海拔四八〇〇尺）、若シクバ頂上ニ近
キ室堂ニ宿スルヲ可トス、（中略）此小屋
ヨリ以上ハ経路ナシ、只人跡ナラント想像
セラル、所ヲ辿リ、（中略）

夫レヨリ急峻なる雪田熔岩軽石ヲ踏ミ、極
北即チ最高点ニ達ス、朝日権現ヲ祭レル小
祠アリ、此嶽ハ舊火山ニシテ、其頂上ハ總
テ廣大ナル溶岩流ヲ噴出セル火孔ノ側面ナ
リ（後略）

《風景》信濃南安墨郡大野川村より登り得、一
日間に上下せんとするは困憊なるを以て、
村より登ること一里半、廢坑せる銀山側の
小屋に一宿し、翌旦絶頂に登るを要す、小
屋より以上道途なく僅に一樵路あるのみ、
漸く登るや、隆夏と雖も積雪を踏む、熔
岩・火山岩亦累々、行歩稍、難、絶頂に舊
火口あり、朝日権現あり、頂下に一湖あり

《風景》すなわち志賀の『日本風景論』から引
用した文章と、後年、志賀自身が《摘譯》として
“Handbook”から訳読した文とは、ほとんど同
じ内容であり、『日本風景論』の乗鞍岳につい
ての記載が“Handbook”からの剽窃であることが
わかる。

ちなみに、『日本風景論』で志賀がカットした
海拔四八〇〇尺とある箇所は、サトウらの原文で
は4800フィートとなっている。一方、『日本風景
論』には文末に取り込まれている湖（庄田訳「山
頂付近には池がある」）のことは、訳読では省か
れている。

なお、《風景》として揚げた『日本風景論』の
文章は、初版を補訂してあり、例えば、初版の小
野川村を大野川村に、溶岩を熔岩に、変えている。
志賀はサトウらの英文を訳したが、現地をよく知
らなかったため、ローマナイズされたスペルだけ
では小野川か大野川かがわからなかったのであっ

た。そのため誤って小野川村としていたのであり、
岩波文庫版も志賀重昂全集版も小野川村のままに
なっている。

『日本山嶽志』のなかの《風景》と《摘譯》の
酷似から、はしなくも『日本風景論』の文の一部
が、“Handbook”からの剽窃であることを明示
してしまったのである。

Ⅲ『日本風景論』にみる志賀重^②の 愛郷心と科学性

1. いわゆる阿蘇火山脈の記載について

志賀重昂の『日本風景論』の主題は、もちろん
日本風景の賛美である。その日本列島の景観の賛
美の裏返しとしての大陸の景観への優越感の強調
も含めて第一の主題とすることができる。しかし
ながら、そのなかに第二の主題とも言うべき、日
本各地の風景賛美によって愛郷心の復権を図る、
という意図がこめられていることも見逃せない。

その復権への意図は、著者志賀重昂の故郷三河
については特に顕著である。志賀が三河に特別な
感情をもっていたことは、『日本風景論』の随所
にみられる。

「日本には火山岩の多々なる事」の章の最初の
部分は、日本列島全体のいわゆる火山脈の話で始
まるが、そのうち『日本風景論』初版における列
島中心部の本州、四国、九州の火山脈についての
記載をみてみよう。

…奥羽に到り、三派に別れて、中原に朝宗し
来る。

…九州に入り、遂に三派に別れ、一派は肥前
の温泉嶽を作り、一派は阿蘇山を成して東
走し、直ちに四國、紀伊に到り、参河に入
り、一派は山陰道に入る。

北の三派は一まとめにして簡潔に述べているの
に対し、南の三派については、それぞれを取り上
げて説明している。なかでも、阿蘇山に始まる一
派は詳しく書かれている。それは参河すなわち志

賀の故郷三河（参河）の名を記したかったからと思われる。

他の二派の記載は短く、実はこのほか、もう一派が日本海を走り、計四派を志賀は本文で説明しているのに、一つは忘れてしまっている。というよりは、この部分については、矢津（1889）の『日本地文学』のなかの第17章 日本の火山にある日本の火山脈の記載を参照して書いたものらしく、矢津が北東派ノ一、二、三、西南派ノ一、二、三としたのを借用したらしい。のちの版では、西南日本については「…九州に入り、遂に二派に別れ、」と改め、そのほかに三つの小脈があるとした。

一派が「参河に入り」とあるが、三河すなわち愛知県東部の山地は美濃三河高原の南半にあたり、火山は一つもない。第三紀の火山岩はあって、志賀の時代には、これも火山とみなされていた。その火山岩の山地が鳳来寺山（瑠璃山ともいう）である。この山の山頂～山腹は溶結凝灰岩の中でも特にガラス質の多い松脂岩、下部は石英安山岩質凝灰角礫岩などからなる⁶⁾。

2. 鳳来寺山記載の意味と問題点

『日本風景論』における火山の科学的記載や臨場感のある登山体験記風の記述の多くが、他書からの剽窃ないしは無断引用であることは、中部日本の諸火山についてもあてはまることがこれまでの分析で明らかになった。

しかしながら、科学的記載はほとんどないにも拘わらず、長文を費やして説明を行っている例外的な部分も存在する。

それが鳳来寺山⁷⁾に関する記載である。以下にその全文を示す。

鳳来寺山 三河南設楽郡東部豊橋町の東北、
豊川上流の傍近 海拔五九二米突
傍近の諸山嶽悉く他岩質に係るも
此山獨り火山岩たり 阿蘇火山脈
の極東
東海道鉄道豊橋町停車場より登り

得、町より豊川に出で、東北行して新城町を経、八束穂より東折し、瀧川を渡り、長篠古戦場に到り此所より北に山径を登り、山麓なる門谷村に達し、橋を渡り鳳来寺の樓門に入り、石階を登る九町にして本堂に達す、階の両側は老杉鬱蒼天日を覆ふ、堂塔殿閣莊嚴を極めたりしも近年災火に罹りて半ば烏有に帰せり、而かも當年結構の幾分は尚ほ遺存し、況んや「隠シ水」「高座石」「巫女石」「行者歸」「猿橋」等の奇蹟あり、沿道の景物亦た豪蕩なるを以て登臨するに足る、本堂より奥院まで九町

前述のごとく、鳳来寺山はかつては火山と考えられていた。現在では、第三紀の海底火山の硬質の部分が侵蝕に抗して残ったものであることが明らかなので、火山とは認定されていない。たしかに火山岩類からなるこの山を「火山岩の多々なること」という章で取り上げることは、間違いではない。山頂の海拔高度は695mと現在では測られており、志賀の記した高度はほぼ奥の院の位置付近にあたる。

これら、火山としての認定や高度など、当時の知見にしたがったために現在では不適切な記載となった点は、やむを得ないといえる。しかしながら、これ以外のところに重要な問題点があるのである。

その問題点の第一は、この山の記載に8行（初版、以下同様）も割くのはバランスを欠いていることである。一般に『日本風景論』の中の重要な火山の記載には粗密があり、短いものを挙げれば、有珠山、恐山、八甲田山、蔵王山、黒姫山などが1行、月山、那須岳、開聞岳が2行、八ヶ岳が3行、赤城山が4行、岩手山、榛名山、乗鞍岳、大山などでも5行にすぎない。これは志賀が入手できた情報量の多少によるアンバランスである。

いかに郷里三河の山であるとしても、身びいき

に過ぎ、内容も、ほとんどが人文的なものにとどまっている。対照のため同じ阿蘇火山脈としている鶴見岳・湯布岳の7行分の記載を掲げてみる。

鶴見嶽 } 豊後速見郡の西部 別府温泉場の
由布嶽 } 背に聳立す阿蘇火山脈は此の山彙
より国東郡の半島を経竟に海を渡
りて四國に入る
共に別府温泉より登り得、鶴見嶽
に登るの溪路は林樹蒼翠滴れんと
す、嶽に舊火口あり、新火口あり、
琉氣噴口三個あり、活火山にして
之れを探討せば奇觀多し、況んや
由布嶽と同じく絶頂より下瞰せば、
前には菡萏灣（火山作用に因り
土地陥没して此灣を生出す）の海
光を望み、別府の市街、温泉場の
屋背、灣岸に隠見し、右に大分町
南の連山を望み、左に國東郡の火
山半島を眺め、雙子の熄火山半島
上に秀絶するを觀る、二山ともに
風光の快闊なること九州東岸に冠
たり

鶴見岳・由布岳に関する記載が科学的に風景を解説しているのに対し、鳳来寺山の文は単なる参詣案内にすぎない。なにをもって「登臨するに足る」としたのか、鳳来寺山をそう評価する根拠が「沿道の景物亦た豪蕩なる」という漠然としたものであり、どうみてもお国自慢の域を出ていない。

第二の問題点は、志賀自身が鳳来寺山に登ったことがあったどうか疑わしいことである。志賀は鳳来寺山に登っていないか、あるいは幼少期などの記憶の曖昧な時期に登ったか、のどちらかで、少なくとも現地で鳳来寺山が火山岩からなることを確認したとは考えられないのである。

なぜならば、もっとも目立つ本堂背後の高さ60mに達する「鏡岩」（屏風岩）などの火山岩（松脂岩などからなる）の大岩壁についても、触れていないからである。火山岩の岩峰が所々に聳

え、100mにも達しようという大岩壁が幾つも連なる突兀とした鳳来寺山の山容は、鳳凰の飛来した聖地という伝承に相応しい。なかでも、この鏡岩は参詣客に強烈な印象を与え、古来、よく知られた信仰の場である。松脂岩という緑～黒みがかった樹脂状の光沢をもつ特徴的な岩石と、魁偉ともいべき山容は、訪れた人に強い印象を与える。

ところが、火山岩とそれが作る山岳の景觀に、異常ともいべき多くの紙数を費やした『日本風景論』のなかで、鳳来寺山の記載に関しては、志賀はそのような山容や火山岩そのものの風景には全く触れていないに等しい。

志賀の文は、もっぱら境内の宗教的意味付けのある事物の描写に終始しているのである。例えば「高座石」「巫女石」などは、それら岩壁の一部であるが、もちろん、風景論としての記載ならば、火山岩であることや景觀について述べるべきであるのに、他の「奇蹟」の名前とともに伝説の石として触れたに過ぎないのは、志賀が現地をよく知らなかったためであろう。志賀は、鳳来寺山に関しても科学的な記載を記したいと思ったにもかかわらず、依拠すべき論文等がみつからず、したがって恐らくは名所案内の類いをもとに記述したのである。

それにしても、なぜ、現地の火山岩からなる“風景”を科学的にはほとんど認識していなかったにもかかわらず、鳳来寺山にこれほどの紙幅を割いたのであるのか。その理由は鳳来寺山は郷里の山で、しかも志賀はこれを三河で唯一の火山岩の山⁸⁾と考えたからなのである。日本の風景の世界に冠絶するのは、火山および火山岩の造る景觀であると主張する『日本風景論』に、郷里三河の山をも取り上げて、特筆大書したいという志賀の願いを、果たすことのできる唯一の山が鳳来寺山であったからであった。

3. 三河の花崗岩山地に関する記載について

三河については火山および火山岩の造る山として鳳来寺山を挙げ得たのみでは、やはり三河についての叙述が少ない。そのため、志賀は花崗岩を

取り上げた。その花崗岩山地については、きわめて奇妙な形で『日本風景論』のなかに組み込まれている上に、山地とは関わりのないものまで混入させるという異様な構成を行っている。

「日本には火山岩の多々なる事」という、『日本風景論』の中核となり、全体の半ばを占める部分の構成を、表2に示した。

すなわち、火山岩について論じている部分に、付録として登山を勧める文を付け、その登山術の間に、日本の花崗岩の山岳の列举を挿入し、その中に山岳ではない「参河の花崗岩」の文を挿入しているのである。付録が一書のほぼ真ん中から始まり、44ページという全体の5分の一以上のページ数を占めるのも異常であるが、その中に異質な記載を無理に入れ子的に二度挿入しているのである。

「(二) 登山の準備」のあとにこう続く。「準備了る、乃ち登山せんとせば、須らく火山岩の山嶽ならんことを要す(第六十三頁より第九十八頁の間に詳なり)。火山岩の山嶽に次ぎて最も高邁爽

表2 『日本風景論』の「日本には火山岩の多々なる事」附録の構成

日本には火山岩の多々なる事	
附録 登山の氣風を興作すべし	(114～158ページ)
《総論》	(114～120ページ)
(一) 登山の氣風を興作すべし	(120～121ページ)
(二) 登山の準備	(122～124ページ)
(三) 花崗岩の山嶽	(124～150ページ)
(一) 九州の花崗岩	
(二) 四國の花崗岩	
(三) 中國の花崗岩	
(四) 瀬戸内の花崗岩	
(五) 畿内の花崗岩	
(六) 湖東の花崗岩	
(七) 中部日本の花崗岩	(141～147ページ)
《挿入》参河の花崗岩	(143～146ページ)
(八) 北日本の花崗岩	
(四) 登山中の注意	(150～156ページ)
《付論》日本人の自然拝崇	(157～158ページ)

凡例：《》に挟まれた語句は米地が付した。

ページは初版による

快なるは (三) 花崗岩の山嶽 是なり。」

本来、日本には火山岩の山岳が多いことの付録として登山術の記事を付したのであるから、花崗岩の山岳とせずに、(火山岩以外の) その他の山岳とした方がわかりやすかったし、論旨に合うはずである。花崗岩の山岳も「最も高邁爽快」と言ってしまうと、大陸の山岳も「最も高邁爽快」なものが多いということになり、日本賛美の文脈には添わない。しかるに敢えて花崗岩の山岳をも賛美の対象としたのは、志賀の故郷三河が花崗岩の多い土地と彼が考えたからなのである。

「中部日本の花崗岩」の項は、鎗ヶ嶽、駒ヶ嶽のあとに、「花崗岩帯、駒ヶ嶽より直ちに美濃の境上に膨張し、竟に参河に入る」として「参河の花崗岩」を挿入し、その後、甲斐国の山岳に続いている。

この無理な操作が何のために行われたかは明白である。「参河の花崗岩」を紹介したいがためである。

日本の山岳の特性として火山や火山岩の山地をとりあげたのは、この『日本風景論』の趣旨からいって当然である。しかし、花崗岩の山地を取り上げては、日本の独自性が薄れる。そのため、付録という形で登山術に関する部分を、洋書からの剽窃で補った。

その登山術の間に、無理な形ではあるが花崗岩の山地に関する地域別の列举を行った。そのなかで、中部日本の花崗岩山地を列举する中に、さらに異質な石材論や海岸論の「参河の花崗岩」を挿入したのである。

一見、志賀の豪放磊落と言われた人柄がものした奔放で支離滅裂な構成に見えるが、実は、志賀は故郷三河の花崗岩の美の記載を挿入するために、付録として付した登山術の記事の中に、さらに登山の対象として花崗岩の山岳案内を挿入する、という細心の巧妙な操作を行って、そのなかの中部地方の山岳の間に、さらに山岳以外の記事である「参河の花崗岩」という項を入れる場所を作ったのである。

この「参河の花崗岩」は志賀の前著『地理学講

義』のなかの2項目をそのまま転載している。しばしば『日本風景論』は新しい風景観をうちだしたといわれるが、実は江戸時代までの古風な風景観が色濃く残っている。なかでも、この「参河の花崗岩」には「海道の実風景たる『白砂青松』は、参河の南部、西部に到らずんば能く眺望すべからず」と述べ、さらに自作の漢詩を掲げ、その中で「身は郷国に帰り心自ずから閑なり。松は青く沙は白し参州の路」云々と詠うのであった。

近代的な風景観の導入として評価されることの多い『日本風景論』ではあるが、実は古典的な日本風景の賛美も多く、ここでは特に志賀の愛郷心が、三河の白砂青松という旧来の風景美を力説しているのである。この三河の海岸は遠州灘に臨み、遠江と連続的であるにもかかわらず、三河がより優れていると強調しているのは、お国自慢の極というべきであろう。

また志賀は、岡崎の花崗岩の石材としての利用に期待する文を「参河に帰って旧火成岩地を踏み、心私かに異日の隆興を祝して去る。」と結んでいる。

本文中の「日本には流水の浸蝕激烈なる事」の章には「…月光、矢矧（参河）の花崗岩溪谷を照らして其の千軍万馬の古戦場に映じ…」というくだりもあり、三河の歴史、すなわち徳川家の故地としての歴史にも触れる記載をしている。

4. 志賀の愛郷心と三河武士末裔の意識

志賀が愛郷心の強い人物であったことについて、宇井（1991）は主筆として地元の『三河新聞』に「三河男児歌」などを創作、掲載し、また郷里の後輩が利用する東京本郷の岡崎藩邸中の施設竜城館の主事を務めたこと、その他の事例を挙げている。

『日本風景論』に、場違いな岡崎城の絵を挿入したことも、志賀の愛郷心のなせる業である。著書のなかに折り込みの図表を入れるのは、コストがかかり、重要なものに限られるが、その折り込みの図のなかに岡崎城の絵が入っているのである。

『日本風景論』初版には、次の4枚の折り込みがある。

- 1：四季の色別の日本の花一覧表
- 2：古歌に詠まれた火山ないし火山岩の山地系統図
- 3：（表）日本国の火山
（裏）千島列島（の火山）
- 4：（表）駒ヶ岳の図および小野ノ滝の図
（裏）岡崎城の図と説明

1～3は本文と対応しており、大きな図表であり、折り込みとするのが妥当である。しかし、4の表の図はともに「花崗岩に於ける浸蝕」という項に対応するものとして載せられているが、その大きさはそれぞれ普通の1頁分に収まるものであり、2頁を図に割けば折り込みにしなくとも良かったはずである。それをわざわざ折り込みにしたのは、志賀が岡崎城の図と説明のために、折り込みの一面全部を用いたかったためであろう。その意図があらわにならぬよう、裏面の空いたところを用いたように見せかけたと考えられる。

三河武士の血をひく志賀は、生まれ故郷にある岡崎城を紹介する図と文を、どうしても載せたかったのである。日本には花崗岩の山地に築かれた城塞が少なからずあるが、岡崎城は志賀が「城墟は花崗岩の細碎して組成せる丘陵上に在り」、その上から花崗岩溪谷を眺めることができる、というだけのことで、わざわざ折り込みの一面を占める破格の扱いになっている。もちろん、同郷の人々からは称賛、感謝されたことであろう。

徳川家の故地である三河には、かつて徳川譜代の水野家などの諸家が封ぜられて、近くは尾張を支え、東海道を扼して遠く江戸を守るという土地であった。志賀のなかに、三河武士の佐幕的伝統の濃い郷里への愛郷心と、近代国家としての明治日本への愛国心とが、共存していた。

志賀が1889（明治22）年8月、『地理学講義』を出版した。この本のもとになったものは前年、東京英語学校や家塾で地理学を講じたものをまとめたもので、そのころは、志賀は火山や火山岩に特に強い関心は持っていなかった。むしろ、故郷三河の地質岩石として花崗岩が関心の的であっ

た。愛郷心に富む志賀にとっては、本来は三河に分布する花崗岩を賛美したかったのであった。

花崗岩に関する記述に注目した内田(1986)は、志賀が岩石の表情をとらえているとし、その堅牢さ、色沢の美しさ、などを描写した文を紹介している。

しかしながら、火山岩については、内田(1986)のいう岩石の表情に類する文は、見当たらない。火山岩に関する志賀の記述は、花崗岩のそれとは比較にならないほど多くの紙幅を費やしたにもかかわらず、火山岩に対する、岩石としての賛美はない。志賀は火山岩はその作る地形である火山を讃えるが、岩そのものについては殆ど触れず、賛美もしていない。すなわち、それまで志賀が関心を寄せていたのは、むしろ花崗岩の方であったが、敵国清にも花崗岩は広く分布するため、清に殆どない火山岩の賛美をこの書の中心に据えたのであった。

これに対して、志賀が火山や火山岩が彼の国粋主義的風景論に重要と考えはじめたのは、同1889年に菊池安が執筆した論文「鹽原地相一斑」を読み、火山岩こそ「我邦固有の国粋景色」(日本固有の国粋的風景)を造るという菊池の論に触発されてからであった(米地、2000)。

それ以前は、むしろ花崗岩の方に志賀は関心を寄せていたのである。なぜなら志賀は、前記『地理学講義』の文のように、郷里三河の振興には花崗岩の利用が重要な役割を持つ、と考えていたからである。そしてその花崗岩に関する箇所を『日本風景論』に再掲載したのである。

このことは、志賀と同郷の人々には大いに歓迎された。その一例を示せば、明治28年4月10日発行の『三河郷友会報』の、「三河の風光中部日本に冠たるものあり」と題する『日本風景論』紹介の文がある。この『三河郷友会報』の一文は、後の版の『日本風景論』巻末に、他の『日本風景論』書評記事とともに再掲載されている。その文は次のように始まる。

近頃矧川志賀重昂君日本風景論を顯はし探究

討尋二百廿餘頁の内六十餘州の景勝悉く蒐る内に左の一節あり蓋し三河武士の氣魂を養成するもの偶然にあらざるを知るべし

そのあとに「参河の花崗岩」の前半が掲載され、さらに「参河石材覇を天下に唱へん」という見出しをつけ、「風景論中又左の一項あり歎するを止めよ 三河に産物無きを 富源は蛟龍の如く地下に潜めり」として「参河の花崗岩」の後半が掲載されている。

Ⅳ『日本風景論』巻頭の謎の詩句 「江山洵美是吾郷」

1.「江山洵美是吾郷」

志賀重昂の『日本風景論』は「江山洵美是吾郷」(山も河も誠に美しいところ、これこそ私たちの郷土)と巻頭に記し、この導入の見事さが本書を明治のベストセラーとした一因になった。

亀井(1988)は『日本風景論』を「ひとくちでいえば、日本の風景の洵美(まことの美)を地理学上の見地から説明し、称賛した本であった。」と述べている。

また岩波文庫版の『日本風景論』初版(1937)の解説で小島烏水は「『日本風景論』の御題目は、吾郷の洵美を説くにあるから」と述べ、新版(1995)の解説で近藤信行は山登りのたびに「志賀重昂の引いた『江山洵美是吾郷』をおもいおこすのだった。」と記している。

2.「吾州」と「吾郷」

この『日本風景論』巻頭の「江山洵美是吾郷」という言葉には二つの謎がある。

第一に、大槻磐溪の原詩はこれとは若干異なる「江山信美是吾州」であった。なぜ「江山洵美是吾郷」と変えられたのか。

第二には、実は初版では大槻磐溪の名は示されていないかった、それはなぜなのか。

第一の謎について前田愛(1990)は、なぜこの改変を行ったのかについては、わからないとしている。大槻磐溪の原詩句は「江山信美是吾州」で

あったのに、『日本風景論』冒頭で「江山洵美是吾郷」と変えたのは、実は重昂の『日本風景論』に込めた狙いがあったためである、と私は考える。

1862(文久2)年、磐溪が「吾州」と詠んだとき、州とは旧国を意味していたはずであり、この詩の場合は「吾州」とは奥州すなわち陸奥国であった。

磐溪にとって父祖の地は現岩手県一関市山目であり、詩は1862年は彼が仙台に帰ったときに創られた。山目も仙台もこの当時は陸奥国であり、同じ伊達領⁹⁾だった。したがって彼は「吾州」という語に郷里山目と藩都仙台の双方を含めた広い地域を意味していた。とはいえ、陸奥国には北は津軽、南部から南の会津、白河に至る諸大名の領地があり、仙台藩伊達領はその一部に過ぎない。そのため磐溪の「吾州」が彼の郷里ないし藩国を意味しているか、陸奥国全体を指すかはわからない。ただ、一般的にこの時代、出身地を言う場合、奥州、羽州、武州、信州などと旧国名を名乗るのが通例であった。したがって、「吾州」が意味するところは郷国なのである。

江戸時代の人々にとって国は二つの意味をもっていた。その一つは日本という国であり、三国などというとき、唐、天竺、本朝すなわち日本が三国であった。しかしながら、その意味での国の意識は一般にきわめて曖昧かつ希薄なものであった。それに対して第二の意味、郷国は明確にその人のアイデンティティを示しており、人に名乗るときにも「くに」は奥州、という言い方を行っていた。つまり江戸時代の州は「くに」郷国なのである。

「南洋巡航日記」を書いた1886(明治19)年には、志賀もまだ「吾州」を三河としていたと、私は考えている。

さらに、『日本風景論』が書かれた1894(明治27)年に至っても、志賀は同書には、府県名は用いず、東海道、東山道などの五畿七道の地域名と、甲斐、駿河などの旧国名を使用している。

例えば「(二) 日本には水蒸気の多量なること」の章では、「東山道の水蒸気(春)」、「東海

道の水蒸気(初夏)」などと区分して説明している。また、「(三) 日本には火山岩の多々なること」の章においては、本州東北の西岸火山脈の説明に、「是れ陸奥の岩木山より起り(中略)両羽の中央を南走し、越後の境に到り、越後と岩代の境界、上野と信濃の境界を限り…」と叙述し、富士山も「駿河、甲斐に跨る」と書く。巻頭で挿絵を描いた樋畑雪湖、海老名明四の二名を紹介した文にもそれぞれ、信州松代の人、参州拳母の人、と記している。

特に後者について「予と同郷国」と言っている点に注目したい。参州の人が同じ郷国であると言う。志賀は三河の岡崎、海老名は同じく三河であるが拳母(現在の豊田市)で、近くではあるがそれぞれ独自の伝統をもつ。「郷国」が同じという意味は同じ三河出身を指していることは間違いのない。

山本・上田(1997)は、志賀の「江山洵美是吾郷」の発想が、南洋のクサイ島で生まれた、とし、それが磐溪の「吾州」を、ふるさと、生まれ故郷という実感に即して「吾郷」としたものであろう、と述べている。

すなわち、山本・上田(1997)は、志賀がクサイ島でサンセンと会った際を記した文を、「南洋巡航日記」(『時事新報』1886.5.25)に見いだし、そこに「江山信美是吾州」が引用されていることを明らかにした。そして、志賀が磐溪の詩句によって「己が生国」を見いだしたと述べ、その生国が日本国なのか、三河なのかと問い、そのどちらでもあったろうと山本・上田(1997)は結んでいる。後述するように、私はこれは三河と考える。

志賀の『日本風景論』においては、一見、科学的で剛直な感じのこの書を読者の共感を呼ぶものとするための、いわば隠し味として甘美なノスタルジアが蔭に隠されているのである。

大室(2003)は、磐溪の「吾州」を「吾郷」としたのは、一見州から郷への縮小にみえなくはないが、志賀の「吾郷」は心理、精神的な意味拡張を加えた郷、日本以外ではありえない、という。ただし、大室(2003)は、志賀の三河国に対する

郷土愛も認識している。

磐溪の「吾州」を志賀が「吾郷」としたのは、山本・上田(1997)によればいわば縮小論であり、大室(2003)説は拡大論である。

私は、この両者のいずれにも賛同できない。私の説は、拡大縮小を可能にした可変論とでもいうべきものである。

三つの考え方を図示してみよう。

拡大して「吾郷」日本：大室説、米地説

⇕

「吾州」郷国：大室説、米地説

⇓

縮小して「吾郷」生まれ故郷：山本・上田
説、米地説

私の可変論の根拠は、志賀自身の記載の次の点に着目したからである。巻頭で志賀は、青ヶ島と千島占守島のそれぞれの住民が「吾郷」ほど良いところはない、と感じており、より安全もしくは恵まれた土地に不本意な移住をさせられていても、苛酷な「吾郷」に帰りたいことを、例として示している。ともに日本の国内の例であり、これらは大室の指摘するとおり縮小的な発想である。

ところが、あとの方になると「然れども日本人が吾が江山の洵美を謂ふは、何ぞ啻に其の吾郷に在るを以てならんや」と述べ、吾郷は拡大的で、山本・上田の指摘のように、日本そのものを指すのである。

そして志賀はさらに続けて「實に絶對上、吾が江山の洵美なるものたるを以てのみ」と述べる。すなわち、生まれ故郷の主観的洵美を言うのは、主観的で、どこでも言われることだが、日本人が日本の江山の洵美を言うのは、絶對的・客観的に他国に比し美しいからである、と志賀は断じている。

志賀が、磐溪の「吾州」を「吾郷」に変えたのは、確定した区域を指す「州」を、縮小、拡大が可能である「郷」に変えて、このような論理の飛

躍をなさんがためであった。

したがって、意図的に変えたので、初版では磐溪の名を出さず、あたかも志賀の考えたオリジナルな語句のように見せかけたのである。しかしながら志賀が「吾郷」と思っているのは、縮小した生まれ故郷や、拡大した日本のみではない。まさに磐溪の「吾州」も志賀の「吾郷」であった。

これまで述べたように、志賀は『日本風景論』において日本の美を説きながら、生まれ故郷の岡崎の城を紹介する文を不自然な形で挿入しているが、さらに不調和なほど參州の山や海岸を登場させている。つまり志賀の「吾郷」は、磐溪の「吾州」でもあったのである。

3. 初版における磐溪の名の欠落の意味

前述のように『日本風景論』初版の巻頭の「江山洵美是吾郷」には、大槻磐溪の名は欠落していたのはなぜかが、第二の謎である。文学作品の場合には、作者を明記する志賀としては異例であった。

磐溪の「吾州」を志賀が「吾郷」に変えたときに、志賀は同義語に置き換えて自作の語句と見せかけることに、内心やましさを感じていたに違いない。でなければ初版で伏せた磐溪の名をあとの版で挿入することはなかったはずである。

初版刊行後、あたかも志賀自身のオリジナルのごとく巻頭に掲げられたこの「江山洵美是吾郷」が、磐溪の「江山信美是吾州」と酷似するとの指摘が、読者から寄せられたであろう。その際、もし志賀自身が、両者は明らかに異なる意味を持つ、と考えていたのなら、のちの版においても、磐溪の名を入れないまま通すか、もしくは磐溪の「江山信美是吾州」との相違を明記したか、のいずれかの方法をとったであろう。

それをしなかったのは、志賀が「江山洵美是吾郷」を、磐溪の「江山信美是吾州」の模倣ないしは換骨奪胎と感じていたからであり、「吾州」を「吾郷」に変えたのは、より広義に用いるための改竄に過ぎなかったからである。

大室(2003)は、志賀について、こう述べる。

「その愛郷心において、あきらかに旧い時代の『吾が州』に結ばれていた。しかしそれを『吾が郷』に置換したとき、万人がひとしく有する故郷へと自身の故土を普遍化することによって、日本全土を故郷としてとらえなおし、『吾が州』へ寄せる特殊的な郷土愛を、総体としての日本に抱く愛国心に転換することができた。そしてその愛国の情意に駆りたてられて、いまや『吾が郷』にほかならない日本の風景の洵美をうたいあげることに成功した。」

志賀の「吾州」と「吾郷」の語の操作については、この大室の指摘は正確というべきであろう。しかしながら、その評価について、私は大きく異なる見解をもつ。大室の叙述の形をなぞりつつ、私の考えを述べてみよう。

「その愛郷心において、あきらかに旧い時代の『吾が郷』や『吾が州』に結ばれていた。しかしそれを新しい『吾が郷』と連結したとき、国民にひとしく意識させる故郷へと自身の故土を特殊化することによって、日本全土を故郷としてとらえなおし、『吾が郷』や『吾が州』へ寄せる普遍的な郷土愛を、総体としての日本に抱く愛国心に連結することができた。そしてその愛国の情意をさらに隣国への敵愾心に駆りたてるため、いまや『吾が郷』として国民に認識させるべき日本の風景の洵美をうたいあげることに成功した。」

すなわち、志賀の「吾州」から「吾郷」への転換を、大室（2003）は、あたかも志賀自身のなかの自然な流れのように説明した。これに対し、私は志賀の「吾州」から「吾郷」への改竄は、志賀が国民に、従来の故郷や郷国への「吾郷」「吾州」愛意識から、日本という故郷「吾郷」愛への飛躍を促し、他国や他国民に対する日本国民の優越感を駆りたてる強引なレトリックのための改竄であった、と考えるのである。

すなわち、志賀自身に内在する「吾郷」岡崎や「吾州」三河に対する愛郷的記載の力説ぶりは、他とのバランスや科学性に欠ける不自然なものになったほどであるが、それは、故郷や郷国への愛を、日本という故郷「吾郷」愛のなかに位置づけるための操作なのであった。日本各地における《火山の造る風景の美しさ》や《水蒸気の造る風景の美しさ》を列挙することによって、各地の読者は、自分の郷土は美しいことを再認識させられ、美しい日本各地を束ねた島帝国日本の風景が、世界に冠たる美しさを持つと認識させられるのである。

志賀自身も、自らの故郷三河の美しさを実感し、強調している。景観として、たしかに三河の海岸や岡崎城跡や鳳来寺山は優れているかもしれない。しかし、『日本風景論』のなかに、多くの紙幅を費やして書かねばならないほど卓絶したものとは思えない。そこには郷土愛に曇った志賀のまなざしがある。しかしながら、『日本風景論』の強引な構成と論理は、志賀自身の「吾州」三河への愛を、「吾郷」日本への愛と併存するものとしたのである。

加藤（1990）は、こういう。「ある意味で、『日本風景論』は、日本人の景観認識において、明治四年の“廃藩置県”が行なったと同様の改革を行なったと見ることができる。」そして古来の「探勝の風景」が廃され、新しい風景秩序が形成され、富士山が廃藩置県における天皇に類似した位置を占める、とした。

このアナロジーを用いれば、富士山（天皇）を頂点とする「吾郷」日本において、「吾州」三河の鳳来寺山のような山（国民、すなわち府県の民）が、新しい風景秩序（国家秩序・府県体制）の中に位置づけられたのである。

「吾州」（例えば三河）意識と「吾郷」日本意識とを、一体化させるため、志賀は磐溪の「江山信美是吾州」を「江山洵美是吾郷」と置き換えた。その時点では、志賀は磐溪の漢詩を剽窃し、しかも、あたかも志賀自身の創造した語句のごとくに見せかけた。この手法は、ミルンの英文を剽窃したと基本的には違いがない。しかし、ミ

ルンの文と異なり、当代屈指の漢詩人と認められていた磐溪の「江山信美是吾州」を知る人は多く、この語句との類似についての指摘があって、のちの版では磐溪の名を入れることにしたのであろう。

それら後続の版で磐溪の名を記するならば、「江山信美是吾州」と磐溪の漢詩のままに書き改めるべきが当然であった。が、それをしなかったのは、「吾州」を「吾郷」と置き換えたままにしなければ、愛郷心と愛国心とを、一体化させる手品の種が失われるためであった。

初版で志賀は磐溪の漢詩を剽窃するという非礼をしたが、のちの版では磐溪の名のもとに、磐溪の原文を改竄した語句を掲げるといふ、別な形での磐溪への非礼をしている。

この磐溪の文の改竄を敢えて行った志賀は、読者に、世界に冠たる「吾郷」日本の美しさを「吾州」（志賀の場合は三河、そして読者はそれぞれの郷里）も持っていると感じさせ、中央集権化の進む明治日本の中であって、郷国と祖国日本との両者への愛は一体である、という幻想を抱かせることに成功した。志賀は確信犯的に改竄を行い、読者を祖国愛と郷土愛との甘美な融合に導くことに成功したのである。

おわりに

近代文学叢書（昭和女子大、1967）は、志賀の地理学書の特徴を、「第一、国粹保存の思想を根底にしている事、第二、頭の中での推論ではなく、実際に自身の足で歩き、自身の目で確かめたこと」とし、以下に前掲の「札幌農学校在学中…」云々などの説明があり、第三として漢詩の素養と文学趣味が挙げられている。土方（1976）も、志賀が「すでに日本の山川を驚嘆すべき精力で跋涉し、地理学的に観察し」て『日本風景論』を書いた、と述べている。

しかしながら、『日本風景論』のなかで、彼が質量ともに力をこめて執筆した火山についても、その記載のほとんど大部分は、これまで本稿および既報（米地、1999、2000）で論じたように、そ

の主たる部分は内外の著書・文献からの剽窃ないしは無断借用で埋められている。志賀が『日本風景論』で取り上げた火山のほとんどは、志賀自身の足で歩いたことがなく、自身の目で確かめたものすら、ごく少数であろう。

もちろん、この時代に30歳そこそこで、日本全土の火山を踏査した経験を持つことは不可能である。だが、それにしても、なぜこのような糊と鉄で全国の火山列挙をしなければならなかったのであろうか。

それは志賀が、日本には火山が普遍的に分布していることに科学的な解説を加え、さらに臨場感あふれる文章で説きたかったのである。しかしながら、登山の経験がほとんどなく、農学士といっても地質、岩石、地形などについては素人同然の志賀にとっては、内外の資料を活用するほかに、全国の火山の記載の方法はなかった。

本稿で取り上げた地域についても、科学的記載について剽窃ができた少数の火山と他の火山とでは、その内容の密度に大きな差ができた。種本の無かった火山の記載には、無理や不自然さのある記載となったものもあるが、なかには歴史的な記載で埋めたものも少なくない。しかし、それら歴史的な記載の多くは、単なる埋め草にとどまらず、志賀のナショナリズムを盛り込んだものでもあった。

初版刊行当時、読者には、どう読まれたのであろうか。火山を列挙した各論部分は、志賀の心情の入り込む余地がほとんどなく、美文たるには散文的内容に過ぎ、短かすぎるので、おそらく多くの読者は、自分の郷里の山にのみ目をとめる程度であったろう。しかし、たとえ読み飛ばしたにしても、日本は火山で満ち満ちていることを、そのページ数の多さから感じたに違いない。

河村（2001）は、志賀の剽窃についてこういう。「…志賀に関しては、あまり強く非難する気にはなれない。著作権法（一八九九＝明治三十二年交付）などが成立する以前の、またそうしたことに伴うモラルや良識が一般に形成される以前の、富国強兵の時代の要請であったとも言えるからであ

る」。私は、この河村の言の前半には賛成はできないものの一理はあると思っている。しかしながら、最後の「富国強兵の時代の要請であった」という河村の記述には強い疑念を感じた。富国強兵の時代が1899年以前のみと読み取れる表現も問題であるが、志賀の剽窃は時代の要請という受け身の曖昧な表現では説明できない。

志賀は富国強兵の路線に立つオピニオンリーダーであった。志賀は、この『日本風景論』執筆時に、対清国強硬路線すなわち開戦を主張するジャーナリストらの会「対外硬六派連合」の代表幹事としてその中心的論客であった。志賀の立場は、「時代の要請」に動かされた受け身のスタンスであったのではなく、志賀は自らが率先して「時代を好戦的なものに変える」というプロパガンダを行うなど、能動的な役割を担ったのである。

志賀の剽窃は、他の山岳家の剽窃のような自己顕示欲（志賀も持ち合わせてはいたが）のためのみの行為とは明らかに違っていた。志賀は一種の確信犯であり、剽窃は、日本の風景、日本の科学、日本の国などの優位性を主張し、他国への侵略を正当化するため、読者を鼓舞するための方途であった。新たな時代、海外侵略の時代を自ら切り開く役割を果たすための方便の一つが剽窃だったのである。

大室（2003）は、特殊的な郷土愛を、普遍的な愛国心にしたのが志賀重昂の『日本風景論』であると解しているが、私はその逆であったと考える。人類だれもがもつ普遍的な郷土愛を、特殊日本的な愛国心に結び付けたのが『日本風景論』なのである。

もしも大室のいうように、普遍的というならば、他国にもそれぞれ風景に根差す愛国心があることとなり、その他国の国民がそれぞれの国の風景を評価するのが当然であるのに、『日本風景論』において志賀はそうは考えなかった。日本の風景が最も優れた特殊なもの、他国に冠たるものであることを、強調したのである。

有史以来、常に海外からの輸入文化に依拠して来た日本が、近代国家としての矜持をどこに求め

るべきか、が明治日本の大きな課題であった。この課題に応じて、風景に拠りどころを求め、他国への劣等感を払拭し、逆に優越感に転換させ、特殊日本的な愛国心を育てた書が、『日本風景論』だったのである。

一方、『日本風景論』には、近代国家日本国民のオピニオンリーダーとしての志賀とともに、参州人志賀の姿がある。『日本風景論』のもつ新旧の奇妙な同居に、明治の知識人としての志賀の限界が見え、志賀がのちに「忘れられた思想家」とみなされた一因は、志賀のこの古い体質によるものであろう。

志賀にとっては、明治維新後は冷遇されてがちだった徳川家ゆかりの地三河もまた、日本列島が世界に誇る美を、同じく保有していることの論証も、行いたかったのである。徳川家康生誕祈願の霊地として崇敬された鳳来寺山や、徳川家にとり因縁深い岡崎城、さらに白砂青松の参河の海岸を、強引に『日本風景論』のなかに登場させたのは、そのためであった。

したがって、『日本風景論』は、その発行された時代にあつては《薩長の武士が京の公家たちと結んで作ったようにみえた日本》を、勤王と佐幕たるとを問わず、ともに天皇のもと、美しい日本列島を国土とする国民国家、と認識させようとした書でもあった。志賀の書によって故郷三河を美しい日本国土として復権させたのと同様、他の戊辰戦争で敗者となった側の人々の故郷もまた、日本帝国の国土として復権したのである。

巻頭の「江山洵美は吾郷」の原形「江山信美は吾州」の作者大槻磐溪もまた、戊辰戦争時の“賊藩”仙台藩における反薩長の理論的指導者であったことは、象徴的なことではないだろうか。その磐溪は、原文の改竄により、佐幕藩参州人志賀にも裏切られたのではあるが…。

成田（1998）はこういう。

「故郷」がさかんに語られる時期— 一八八〇年代、一九三〇年代前半、一九六〇年代後半から七〇年代前半は、いずれも国民国家

の節目でもあり、それぞれ国民国家の成立期、転態期、そして変容期にあたっている。

志賀の『日本風景論』(1894)はまさに国民国家の成立期にあたり、海外への侵略が始まらんとする時期に刊行され、『「故郷」がさかんに語られる時期』に引き続き『「風景」がさかんに語られる時期』¹⁰⁾が現れた。

「故郷」と「風景」とは、新たに生まれた国民国家にとって、国民が集団的アイデンティティを持つための重要なキーワードだったのである。その二つを結び付け愛国心に繋ぐために、志賀は、敢えて剽窃や改竄を確信犯的に『日本風景論』に織り込んだのであった。

注

- 1) 最近では大室(2003)が、『日本風景論』のなかの志賀の日本風景解説を「まるで日本全体が巨大な火山島であるかのような」と述べ、さらに「日本には火山岩の多々なること」の項について、志賀が他の項との比率を無視して「情熱的にこの項の解説に力をつくしている」と記している。
- 2) 『日本風景論』は、1894年の政教社刊行の初版以降、1903年博文館刊行の第15版まで版を重ねた。2003年現在、入手しやすいものは、岩波文庫版および講談社学術文庫版である。文献リスト参照。
- 3) 三田(1973)は、小島烏水が高頭式編『日本山嶽志』(1906)に寄せた文に『日本風景論』の種本の一つとして、このマアレイ出版の本を挙げた、と述べている。しかし、これは上記の烏水の『アルピニストの手記』と混同したものらしい。
- 4) なお、同書の第三版(1891)からは“Handbook for Travellers in Japan”と書名が変わり、編者もChamberlainとMasonになる。荒山(1989)は、志賀が、第三版から中部山岳の記事を借用したと推定しているが、記載の内容を検討すると、少なくとも第二版までのものを志賀が用いたとみられる(米地、1999)。
- 5) 黒岩(1979)は、小島自身も剽窃を行っていることを武田久吉や近藤が批判していると、紹介している。一方、山本・上田(1997)は、黒岩(1979)が志賀の剽窃、特にガルトンの“Art of Travel”からの剽窃を取り上げて“断罪”したことについて論難している。例えば、黒岩自身が『明治前期は、翻訳、翻案ということにきわめて寛容な時代』としている

のならば、志賀と同じくガルトンから剽窃した村上獨浪を不問にしたのは了解しがたい、という。また、ガルトンからの剽窃とされた部分は登山のための「技術上の資料」であって、『日本風景論』の中心的論点ではない、等々。

だが、志賀の『日本風景論』の出版の時期は、明治前期とはいえず、むしろ明治後期のものであり、長年に亘り版を重ね、社会に対する大きな影響力のあった『日本風景論』と、知る人も少ない村上獨浪の『冒険旅行術』(1902)とは同断にはできない。

- 6) 鳳来寺山の優れた地学的解説書としては、横山(1996、2002)の著書があり、これらを参照した。
- 7) 鳳来寺は、山号を煙巖山という。私は梅雨時に鳳来寺山を訪ねた折、雨雲の奥に浮かび上がる鏡岩の景観に、この山号が相応しいものであると感じた。
- 8) 実は鳳来寺山以外にも、明神山、茶臼山など設楽火山岩類からなる山々がある。この一群の火山岩からなる山々は、いわゆる第三紀の設楽火山の痕跡である。志賀はおそらく小縮尺の地質図を見て、この火山岩地帯のすべてが鳳来寺山である、と誤解したのであろう。
- 9) 磐井川左岸の山目は伊達領で、右岸が一関藩(田村領)であった。田村家は対外的には独立した大名家であるとともに、伊達一門の中では一種の客分としての扱いを受ける立場でもあった。
- 10) 脇水の著作『日本風景誌』(1939)は国民国家転態期後まもなく登場し、樋口の『景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間』(1975)および『日本の景観』(1981)は国民国家変容期の末期とその後に広く読まれることになる。

文 献

- 荒山正彦(1989): 明治期における風景の受容—『日本風景論』と山岳会—。人文地理41.551-564.
- 宇井邦夫(1991): 志賀重昂 人と足跡。現代フォルム。
- 内田芳明(1986): 地理学考と風景の現象学 志賀重昂『日本風景論』と内村鑑三『地人論』。『歴史と社会』7.96-115.
- 大室幹雄(2003): 志賀重昂『日本風景論』精読。岩波現代文庫。
- 大久保喬樹(2003): 日本文化論の系譜『武士道』から『「甘え」の構造』まで。中央公論社。
- 加藤典洋(1990): 日本風景論講談社。
- 亀井俊介(1988): ナショナリズムの文学。講談社学術文庫。
- 河村正之(2001): 山書散策—埋もれていた山の名著を

- 発掘する。東京新聞出版局。
- 菊池 安 (1889a): 鹽原地相一斑. 地学雑誌. 1. 566-571.
- 黒沼 健 (1979): 登山の黎明. ぺりかん社.
- 黒沼 健 (1991): フランシス・ガルトン「旅行術」と『日本風景論』. 日本古書通信. 56 (8). 1.
- 小島烏水 (1936): アルピニストの手記. 書物展望社. 平凡社ライブラリー版. 1996.
- 近藤信行 (1992): 解説. 小島烏水「日本アルプス」. 岩波文庫. 423-444.
- 近藤信行 (1995): 解説. 志賀重昂『日本風景論』. 岩波文庫. 383-395.
- Satow, E.M. & A.G.S. Hawes (1884): Handbook for Travellers in Central & Northern Japan. 2nd Ed. John Murray. London.
- サトウ, E. 編著, 庄田元男訳 (1996): 明治日本旅行案内〈下巻〉ルート編. 平凡社.
- 志賀重昂 (1894): 『日本風景論』 初版. 政教社. (復刻版 日本の山岳名著 1975, 大修館 書店)
- ほかに次の各版を参照した。
- (1896): 第6版. 政教社.
- (1898): 第9版. 政教社.
- (1903): 第15版. 博文館.
- (1928): 志賀重昂全集第4巻所収. 同刊行会. 1-194.
- (1937): 岩波文庫版.
- (1976): 講談社学術文庫版. 上, 下.
- (1980): 政教社文学集. 明治文学全集第37巻所収. 筑摩書房. 3-97.
- (1995): 岩波文庫新版.
- 昭和女子大学近代文学研究室 (1967): 志賀重昂. 近代文学研究叢書26巻. 143-213.
- 神保小虎 (1891): 北海道の火山. 地学雑誌. 3. 26. 57-61.
- 高頭 式 (1906): 日本山嶽志. 博文館.
- 成田龍一 (1998): 「故郷」という物語 都市空間の歴史学. 吉川弘文館. 259.
- 原田豊吉 (1888): 日本地質構造論. 地質要報. 明治21年. 4. 309-387.
- 樋口忠彦 (1975): 景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間. 技法堂出版. 168.
- 樋口忠彦 (1981): 日本の景観 ふるさとの原型. 春秋社. 269.
- 土方定一 (1976): 解説. 志賀重昂『日本風景論 (下)』. 講談社学術文庫. 178-188.
- 前田 愛 (1990): 前田愛著作集. 6. 筑摩書房.
- 三田博雄 (1973): 山の思想史. 岩波書店.
- Lubbock, J. (1892): The Beauties of Nature and the Wonders of the World We Live. 板倉勝忠訳 (1933): 『自然美と其驚異』. 岩波文庫.
- Milne, J. (1878): On the Form of Volcanos. Geol. Mag., 5. 337-345.
- Milne, J. (1886): The volcanoes of Japan. Trans. Seismol. Soc. Japan 10. 1-184.
- 矢津昌永 (1889): 日本地文学. 丸善.
- 山本教彦・上田誉志美 (1997): 風景の成立 - 志賀重昂と『日本風景論』. 海風社.
- 横山良哲 (1996): 美しき大峡谷 1億年の旅 - 大断層中央構造線の謎を追う - 風媒社.
- 横山良哲 (2002): 奥三河自然讃歌 ふるさとの大地といのちの輝き 風媒社.
- 米地文夫 (1989): J. ミルンの地理学, 特に地形学における史的意義 - 志賀重昂とのかかわりを中心に - 日本地理学会予稿集. 35. 284-285.
- 米地文夫 (1990): 志賀重昂『日本風景論』の分析 - 火山に関する剽窃と国粹主義の関係 - 日本地理学会予稿集. 38. 46-47.
- 米地文夫 (1999): 北日本の火山に関する志賀重昂『日本風景論』の記載 - 剽窃とその背景としての政治的意図 - 総合政策. 1. 477-488.
- 米地文夫 (2000): 志賀重昂『日本風景論』の政治的意図と菊池安論文との関係 - 東日本および小笠原諸島の火山記載をめぐる - 総合政策. 2. 123-133.
- 米地文夫・中嶋文雄 (未発表): 志賀重昂『日本風景論』の地形形態の記載における数学的誤謬. 形の科学会誌. (投稿予定)
- 脇水鐵五郎 (1892): 浅間山の記. 地学雑誌. 4. 38. 55-61.
- 脇水鐵五郎 (1939): 日本風景誌. 河出書房.
- Galton, F. (1855): Art of Travel. Murray. London.

(2003年9月30日原稿提出)

(2004年1月8日受理)

Shigetaka Shiga's "Nihon Fukei-ron" and Love of One's Hometown and Patriotism

— Concerning Descriptions on Volcanoes in Central Japan —

Fumio YONECHI

Abstract

This paper focuses on the descriptions by Shigetaka Shiga of volcanoes in central Japan, selected from his work the "Nihon Fukei-ron" (1894), in which descriptions of volcanoes play a core role of the book, as part of my analysis of his descriptions on volcanoes so as to clarify various aspects of his plagiarism and document tampering. My study proves that the article "Handbook for Travelers in Central & Northern Japan," which is contained in the "Nihon Sangaku-shi", edited by Shoku Takatoh (1906) and introduced therein as Shiga's translation, has almost the same content as some descriptions in the "Nihon Fukei-ron," thereby analyzing Shiga's plagiarism.

I also show that it was Shiga's passionate love of his hometown that caused him to put an excessively great emphasis on descriptions of his hometown Mikawa and analyzed that his tampering with the words and phrases of Bankei Ootsuki was a forced manipulation in order to connect love of hometown to love of nation.

These cases of tampering and plagiarism committed by Shiga and his unnatural composition of writings were done out of his over-zealous intention to enhance the readers' patriotism by describing the Japanese landscape as far more excellent than that in any foreign country.

Key words

Shigetaka Shiga's "Nihon Fukei-ron", Shoku Takatoh's "Nihon Sangaku-shi",
Bankei Ootsuki, Love of One's Hometown, Patriotism